

# 政党によるカーボンニュートラル達成への影響

2025年2月15日

## 1. はじめに

カーボンニュートラルとは、温室効果ガスの排出を実質ゼロにすることを指し、地球温暖化対策として世界的に注目されている。日本は、2050年までにカーボンニュートラルを達成する目標を掲げている<sup>1</sup>。一方、カーボンハーフは、特定の基準年と比較して温室効果ガスの排出量を半減させることを意味する。東京都は、2030年までに2000年比で温室効果ガス排出量を50%削減するカーボンハーフを目指している<sup>2</sup>。これらの目標を達成するためには、再生可能エネルギーの導入やエネルギー効率の向上など、多岐にわたる取り組みが必要である。

しかし、脱炭素化を進める過程で、CO<sub>2</sub>の排出削減効果と引き換えに経済効率の低い投資が増加すれば、一国全体で見た生産性の低下につながり得るとの指摘もある<sup>3</sup>。このように、カーボンニュートラルの推進と経済活動の両立は大きな課題となっている。

本稿では、東京都議会に焦点を当て、政治家や議員がカーボンニュートラルと経済活動のバランスをどのように考えているのか、その政策選好が何によって決まるのかを明らかにする。具体的には、各政党のイデオロギーや所属会派が、カーボンニュートラル達成に向けた目標年や経済への影響に関する判断にどのような影響を及ぼしているのかを検証する。

## 2. 先行研究

先行研究では、政党の政治的立場や所属会派が政策選好に与える影響が多く指摘されてきた。例えば、谷口・ウィンクラー（2019）は、日本の主要政党の公約を分析し、

---

<sup>1</sup>資源エネルギー庁「第3節 2050年カーボンニュートラルに向けた我が国の課題と取組」

<<https://www.enecho.meti.go.jp/about/whitepaper/2021/html/1-2-3.html>>アクセス日2025年2月15日

<sup>2</sup>東京都教育委員会「カーボンハーフスタイル推進資料（令和4・5・6年度）」<[https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/environment/carbonhalfstyle\\_document](https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/environment/carbonhalfstyle_document)>アクセス日2025年2月15日

<sup>3</sup>三井住友信託銀行「脱炭素と経済成長は両立するのか」<[https://www.smtb.jp/-/media/tb/personal/useful/report-economy/pdf/113\\_0.pdf](https://www.smtb.jp/-/media/tb/personal/useful/report-economy/pdf/113_0.pdf)>アクセス日2025年2月15日

それらを政治的・経済的な左右対立軸上で位置付ける研究を行っている。その結果、保守政党は経済政策において自由主義的な姿勢を強めており、経済活動を優先する傾向があることが示された。これは、経済成長を重視し、規制の緩和を推進する政策が保守政党によって支持されやすいことを意味する。

藤井（2021）は、地方議会における政党構成が政策選択に与える影響を分析した研究である。本研究では、保守系政党が優勢な場合に経済政策が優先される傾向があることを指摘している。また、有効会派数が増加することで合意形成が困難になり、政策の遅延や財政規律の緩みに繋がる可能性があることも示されている。このことから、議会の構成や政党の力関係が、政策決定プロセスの速度や実行可能性に影響を与えることが分かる。

また、砂原（2021）は、地方政府の政策決定における政治的背景を分析し、環境政策と経済政策の支持政党の違いを明らかにしている。本研究では、環境政策は革新派政党に支持されやすく、一方で経済政策は保守派政党が優先する傾向があることが示されている。これは、革新派政党が環境保護や規制強化を重視するのに対し、保守派政党は産業発展を優先する政策を打ち出す傾向があることを反映している。

さらに、近藤・宮本（2011）では、地方議会の政策選択が、自治体の財政状況、政策分野の特性、および議会構造の3つの要素に大きく依存していることが示されている。特に、保守系政党が優勢な場合、経済政策が優先される一方で、革新系政党が強い場合には福祉や環境政策が重視される傾向がある。この研究は、地方議会の政策選択が単なる政党のイデオロギーによるものだけでなく、財政状況や行政の制約によっても影響を受けることを示唆している。

以上の先行研究を踏まえると、政党の政治的立場や所属会派が政策態度に与える影響が指摘されている。保守的な会派は経済活動を優先し、環境政策に対する義務化には慎重な態度を示す一方、リベラルな会派は積極的な環境政策を推進する傾向がある。また、有効会派数が多い場合、意思決定プロセスにおける合意形成が難航し、政策の進行や実現が遅れることが示唆されている。

これらの背景から、都議会においても同様の傾向が見られると考えられる。政党によってカーボンニュートラル達成に向けた目標年が異なることが予測される。また、有効会派数の増加によって合意形成が難しくなるため、政策実現の難度が高まる可能性がある。さらに、所属する会派は議員の政策態度に影響を与え、「達成目標年」や

「経済への影響」に関する判断に大きく関与すると考えられる。本研究では、これらの知見を基に、東京都議会におけるカーボンニュートラル政策に関する議員の政策選好について分析を行う。

### 3. 仮説

先行研究を踏まえ、本研究では以下の仮説を検証する。

第一に、政党（会派）によりカーボンハーフやカーボンニュートラルへの目標年の違いがあることが予想される。砂原（2004）によれば、政党（会派）の革新・保守といったイデオロギーが政策選好に影響を与えるとされており、環境政策は革新派政党に支持されやすく、経済政策は保守派政党が優先する傾向がある。この知見を踏まえると、より革新的な政党ほど早期のカーボンニュートラル達成を目標に掲げ、逆に保守的な政党はその達成年をより遅く設定する可能性がある。したがって、政党（会派）のイデオロギーがカーボンハーフやカーボンニュートラルの目標年の違いを決定する要因となると考えられる。

第二に、カーボンハーフやカーボンニュートラルの目標達成年の違いは、イデオロギーによって説明されると仮定する。具体的には、環境政策を重視するイデオロギーを持つ議員は規制強化や社会的変革を伴う施策を積極的に進めるため、より早期の目標設定を行う傾向がある。一方、経済成長や市場の自由を重視するイデオロギーを持つ議員は、企業や産業界への影響を考慮し、達成年を遅らせる可能性が高い。このように、イデオロギーが、カーボンニュートラルに向けた政策の速度や具体的な達成年の設定に影響を与えると考えられる。

### 4. データ、変数、分析手法について

本研究では、津田塾大学中條研究室が2024年9月末から11月にかけて都議会議員123名（調査開始時）を対象として実施した第7回都議会議員調査によるデータを用いる。調査は郵送法で行い、回収は郵送のほかWeb回答も受け付けた。70名から回答（23名郵送、47名Web）があり、回収率は56.9%である。質問によっては回答に欠損値があるため、分析に用いる観測数（n）はその都度異なる。政党ごとの回答状況をまとめた表を表1として下に示す。

表1 政党ごとの調査への回答状況

会派	回答数	議員人数
自由民主党	6	30
立憲民主党	3	14
公明党	6	23
日本共産党	9	19
都民ファーストの会	7	27
ミライ会議	1	4
自由を守る会	1	2
無所属	4	5
合計	37	124

以下は、調査データから利用した変数の尺度を説明し、表2-1としてまとめたものである。本稿では、カーボンハーフ・カーボンニュートラルの現実的な達成目標と事業者への介入度を調査し、それぞれで分析を行った。

表2-1:使用する調査データと変数尺度

	調査票の質問	尺度
カーボンハーフ達成目標	カーボンニュートラルに向けたエネルギー転換についての経済や産業の影響そして現状の技術を踏まえると、東京都におけるカーボンハーフとカーボンニュートラル達成の現実的な目標年はいつ頃とお考えでしょうか。 －カーボンハーフ	2020から1年刻み
カーボンニュートラル達成目標	カーボンニュートラルに向けたエネルギー転換についての経済や産業の影響そして現状の技術を踏まえると、東京都におけるカーボンハーフとカーボンニュートラル達成の現実的な目標年はいつ頃とお考えでしょうか。 －カーボンニュートラル	2020から1年刻み
事業者への介入度	2030年カーボンハーフ実現のために、東京都は事業者にどの程度介入すべきだとお考えですか。あなたのお考えに一番近いものを1つお選びください。	規制の強化・拡充を通して積極的に介入する 補助金や技術支援で促すが、積極的介入は避ける 市場に任せ、積極的介入は避ける その他

各政党のイデオロギー（0=最も革新、10=最も保守）の分布を基に、それぞれの政治的立場について表2-2に示す。共産党の議員は、平均的に最も革新派（リベラル）の立場をとっている。中央値は0.0であり、回答者の多くが極端に革新的な立場を取る

傾向にある。ただし、最大値が5.0であることから、一部にはやや中道寄りの考えを持つ議員もいると考えられる。立憲民主党は、ほぼ中道に近いが、やや革新寄りの政党であることが分かる。中央値は5.0であり、政党内での意見のばらつきが比較的小さい。最小値4.0、最大値8.0という範囲から、やや左寄りの立場を持つ議員が多いと考えられる。公明党のイデオロギーは中道からやや保守寄りに位置している。平均値6.50、中央値6.5と、立憲民主党よりも保守的な傾向が見られるが、極端な保守派は少なく、政党全体としてはバランスを重視する傾向がある。都民ファーストの議員は、公明党よりもやや保守寄りであり、中央値は7.0と比較的高い。ただし、最小値4.0から最大値10.0まで幅広く分布しており、政党内でも意見のばらつきが大きいことが分かる。これは、都民ファーストが比較的新しい政党であり、多様なバックグラウンドを持つ議員が所属しているためと考えられる。自民党は最も保守的な政党であり、平均値7.44、中央値8.0と、他の政党よりも明確に保守寄りの立場を取る傾向がある。最小値5.0であることから、中道寄りの議員も一部存在するが、大多数の議員は保守的な政策選好を持っていると考えられる。

表2-2 イデオロギー

政党	平均値	標準偏差	最小値	最大値	中央値
共産党	1.46	1.98	0	5	0
立憲民主党	5.20	1.64	4	8	5
公明党	6.50	1.05	5	8	6.5
都民ファーストの会	6.64	1.91	4	10	7
自民党	7.44	1.13	5	9	8

## 5. 分析結果

### 5.1. データの概要

各政党のカーボンハーフおよびカーボンニュートラルのデータを収集し、平均値、最小値、最大値、分散、中央値などの基本統計量を算出した。表3に主な統計量を示す。

カーボンハーフの達成年について、議員の平均的な見解は2035.2年である。最小値は2020年、最大値は2050年と幅があるが、中央値は2030年となっており、多くの議員が2030年をカーボンハーフの達成年として想定していることが分かる。これは、日本

政府が掲げる2030年までに温室効果ガス排出量を半減するという目標と概ね一致すると考えられる。

一方、カーボンニュートラルの達成年については、平均値が2053.6年と、政府が掲げる2050年目標よりやや遅い傾向にある。最小値は2020年、最大値は2080年と幅広く、政策の実現可能性や技術進展に対する見解の違いが表れていると考えられる。ただし、中央値は2050年であり、多くの議員が政府目標と同様に2050年をカーボンニュートラル達成の基準と見なしていることが示唆される。

また、分散を比較すると、カーボンハーフの分散は92.8、カーボンニュートラルの分散は142.7となっており、カーボンニュートラルの方が意見のばらつきが大きいことが分かる。これは、短期的な目標であるカーボンハーフに比べ、長期的なカーボンニュートラルの実現可能性や政策の方向性に関して、議員の間でより幅広い見解があることを示している。

表3 基本統計量

	平均値	最小値	最大値	分散	中央値
カーボンニュートラル	2053.6	2020	2080	142.7	2050
カーボンハーフ	2035.2	2020	2050	92.8	2030

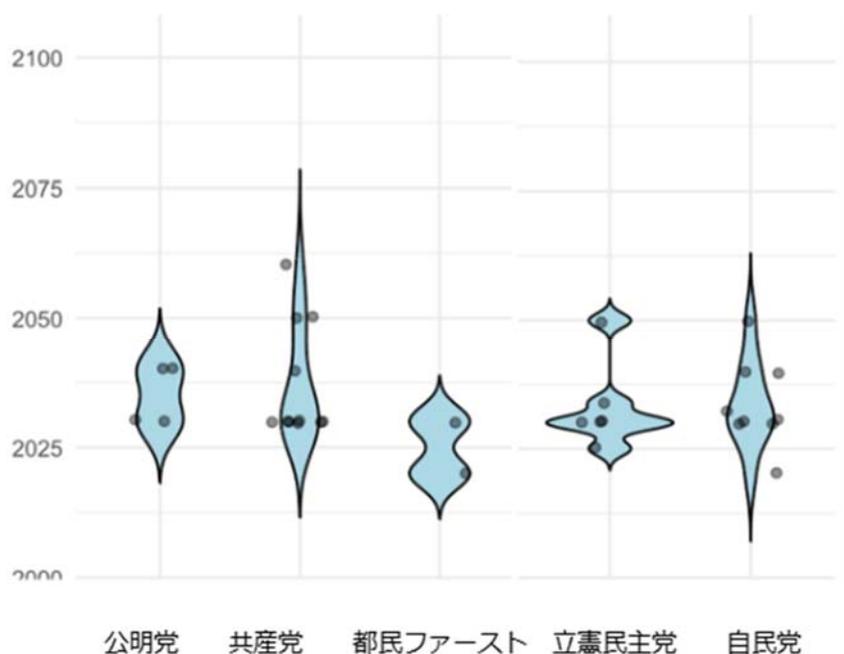
また、各政党ごとのカーボンハーフおよびカーボンニュートラルの目標年に関する統計値を以下の表4にまとめる。表4から、各政党の環境政策に対する姿勢が異なることが示唆される。例えば、公明党や都民ファーストは補助金政策を中心に据えている一方で、共産党や立憲民主党は規制強化を重視している。

表4 政党別の基本統計量

	カーボンハーフ		カーボンニュートラル		介入度
	平均	分散	平均	分散	最頻値
自由民主党	2043	66.7	2069	140.2	さまざま
日本共産党	2034	311.1	2049	230.0	規制の強化
公明党	2032	16.0	2048	16.7	補助金
都民ファーストの会	2032	16.7	2049	42.7	補助金
立憲民主党	2050	0.0	2065	50.0	規制の強化

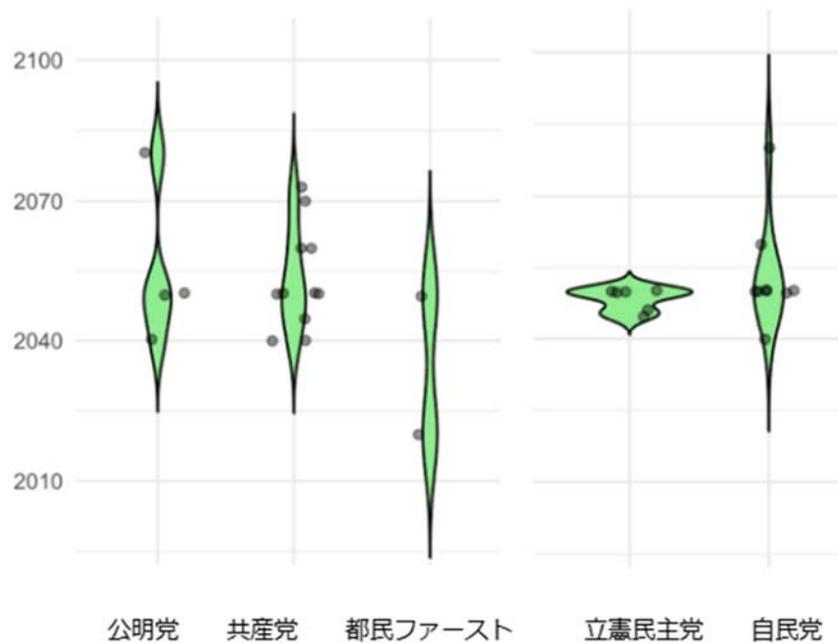
カーボンハーフの目標年のバイオリンプロットを図1に示す。バイオリンプロットの分析から、各政党のカーボンハーフ目標年には明確な違いが見られた。共産党は最も早い2020年から広がりを持ち、最大値が2100年近くまで達しており、これは外れ値やデータのばらつきの影響が大きいことを示唆する。一方、公明党と都民ファーストはともに2030年から2040年の範囲に収まり、比較的安定した分布を持つ。立憲民主党と自民党は2030年から2050年の範囲で分布し、他の政党と比べてやや遅い目標年が設定されていることが分かる。

図1:カーボンハーフのバイオリンプロット



次に、カーボンニュートラルのバイオリンプロット（図2）では、共産党は最も早い2020年から広がりを持ち、最大値が2100年近くまで達しており、これは外れ値やデータのばらつきの影響が大きいことを示唆する。一方、公明党と都民ファーストはともに2040年から2050年の範囲に収まり、比較的安定した分布を持つ。立憲民主党は中央値が2057年付近で分布が広がっており、自民党は最も遅い目標設定となる2069年付近に集中している。特に共産党の最大値がバイオリンプロット上で実際のデータよりも大きく広がっていることから、外れ値の影響を考慮する必要がある。

図2:カーボンニュートラルのバイオリンプロット



総括すると、リベラル寄りの政党（共産党・立憲民主党）はより早い目標年を設定し、環境政策を積極的に推進する傾向があり、公明党・都民ファーストは政府の公式目標と一致し、バランス型の政策選好を持ち、保守寄りの自民党は目標年が遅く、議員による意見のばらつきも大きい。これは、イデオロギーがカーボンハーフ・カーボンニュートラルの目標設定に強い影響を与えていることを示唆している。

## 5.2. カーボンハーフの回帰分析

本研究では、カーボンハーフの目標年がイデオロギーによってどのように異なるかを回帰分析により検証する。しかし、全員のデータを用いた場合、政党間の違いが必ずしも明確でなく、有意な結果は得られなかった。これは、イデオロギーが中間に位置する政党所属議員（公明党や都民ファースト）が含まれていたためと考えられる。そこで、最もリベラル寄りの共産党所属議員（9名）と最も保守寄りの自民党所属議員（6名）のみを対象とし、両者の違いを明確にする形で再分析を行った。その結果、以下の表5のような関係が確認された。

表5から、より左派的なイデオロギーであるほどカーボンハーフの目標年が早くなる傾向が確認された。これは、経済成長よりも脱炭素を重視している可能性を示唆している。

表5 カーボンハーフ回帰分析結果

カーボンハーフ	係数	標準誤差	p値
切片	2031.63	1.00	<2e-16
イデオロギー	10.63	1.41	2.73e-06
決定係数(R <sup>2</sup> )	0.80		
n	15		

### 5.3. カーボンニュートラルの回帰分析

次に、カーボンニュートラルの目標年についても同様の回帰分析を行った。その結果を表6に示す。イデオロギーがカーボンニュートラルの目標年に強い影響を与えていることが示唆される。特に、保守的な政党ほど目標年が遅くなる傾向が顕著に現れており、これは技術開発や社会の準備期間を重視している可能性がある。

表6 カーボンニュートラル回帰分析結果

カーボンニュートラル	係数	標準誤差	p値
切片	2049.00	1.21	<2e-16
イデオロギー	17.63	1.71	6.45e-08
決定係数(R <sup>2</sup> )	0.88		
n	15		

## 6. 結論

本分析の結果から、カーボンハーフおよびカーボンニュートラルの目標年は政党のイデオロギーによって大きく異なることが明らかになった。特に、より左派的な政党ほど目標年が早くなる傾向が見られた。これは、政党ごとの政策アプローチの違いに起因する可能性がある。

## 参考文献

近藤春生・宮本拓郎(2011)「地方議会における政策選択のメカニズム—財政と政策分野の分析」『年報政治学』2010 巻 55 号 p. 5-19< [https://doi.org/10.11228/p.cs.2010.55\\_5](https://doi.org/10.11228/p.cs.2010.55_5)>

砂原庸介(2021)「地方政府の政策決定における政治的要因」『年報政治学』72巻1号 p. 1\_225-1\_251<[https://doi.org/10.50898/pfsjipf.2.0\\_161](https://doi.org/10.50898/pfsjipf.2.0_161)>

谷口尚子、クリス・ウィンクラー(2019)「世界の中の日本の政党位置」『年報政治学』71巻1号 p. 1\_128-1\_151< [https://doi.org/10.7218/nenpouseijigaku.71.1\\_128](https://doi.org/10.7218/nenpouseijigaku.71.1_128)>

藤井大樹(2021)「都道府県議会の政党システムと政策選択」『年報政治学』72巻1号 p. 1\_225-1\_251< [https://doi.org/10.7218/nenpouseijigaku.72.1\\_225](https://doi.org/10.7218/nenpouseijigaku.72.1_225)>